

ねないですから…。

関根 ですから、作品によっては1年後2年後の、まだ全く企画として発表されていないものとして発表されていくもので、先に台本だけ頂くケースも多々あります。守秘義務があるので、ちろん外部に言うことはありませんが。

映倫の歴史

——『鬼滅の刃』の場合、どのあたりがPG12の区分になる理由だったのでしょうか。

石川 個別の作品で、どこをどう審査したという内容は、我々からはお伝えできないのです。作品の申請者の方が話すことは何も問題ないのですけどね。

——なるほど、わかりました。では、そもそもPG12とは何か、歴史も含めて伺えますでしょうか。

石川 まず映倫の歴史をざっくり説明させてもらうと、もともと戦前は映画を国が検閲していました。戦後はGHQが検閲を行っていましたが、彼らはいずれ引き上げますから、「映画業界の方でやりなさい」となって、1949年

に発足したのが「映画倫理規定管理委員会」、つまり旧映倫です。これは、今でいう映連の中にあつた組織です。

しかし、1956年に公開された『太陽の季節』をはじめとする「太陽族映画」で、審査のあり方に世間から批判を浴び、また映画法が出来てしまうのではないかと、いう危機感の中で、映画業界とは

一線を画した第三者機関の「映倫管理委員会」（新映倫）を1956年12月1日に発足させました。これが今に続く映倫です。2009年に名称が「映画倫理委員会」に変わり、2017年に法人化（一般財団法人映画倫理機構）しましたが、映倫」という呼び名は変わっていません。映画業界から独立した立場なので、我々ももとは映画業界にいた人間が多いですが、映倫に来るときは出向ではなく、元いた会社を辞めて転職しています。

残酷描写きつかけのPG12

——映倫が設けている4区分についても伺えますか。今回のトビ

つけようとしていますよね。2018年12月の全国紙の地方版で、宮崎事件や酒鬼薙魔事件とPG12の成り立ちを結びつけようとした取材を受けたことがあります。でも、酒鬼薙魔事件が起きる前からPG12を作る動きはあったので、事件を受けた結果ではないのです。ただ、世相がそう流れていき、そういったことを考慮しないといけないと、必要性が高まっていたのは確かだと思います。

——ということは、やはりPG12の審査は暴力や残酷描写が中心になるのですか。

石川 そんなことはありません。性愛描写や、未成年の飲酒・喫煙でも、今の基準に照らし合わせて色々なところで判断しています。

尾崎 映倫のホームページでも公表されていますが、審査には8項目の映画分類基準があります。主題、言語、性表現、ヌード、暴力、恐怖、麻薬、犯罪。この8つに照らして、その映画がどの区分に当てはまるのか、という審査をやっています。

石川 PG12の場合、どこで

何が引っかかっていることが多いかという統計はとっていませんが、（未成年の）喫煙シーンはけっこう多いイメージがあります。名作『ペーパー・ムーン』（1973年製作）は、昔の公開時はGでしたが、「午前10時の映画祭」で上映する際に審査したときはPG12になりました。

尾崎 喫煙はけっこうありますよね。『小さな恋のメロデー』（1971年製作）と『スタンド・バイ・ミー』（1986年製作）も、未成年者の喫煙の描写で、（午前10時の映画祭上映時は）PG12になりました。あとは、薬物の使用

石川 時代が変わってきているということですね。

関根 映倫の4区分は、普段から申請されている製作者の方は頭に入っているので、希望する区分でどう描写すればいいのか、だいたいの把握して動かれていますからね。

尾崎 露骨なセックスシーンがあるにもかかわらず、Gを希望する申請者はまずいません。ただ、GとPG12の境目はあいまいとい

●太陽族映画問題

石原慎太郎の同名小説を映画化した『太陽の季節』が“成人向”映画として1956年5月に公開され、大ヒットとなった。ただ、その反倫理的な内容は各地で激しい反発を呼んだ。この作品を起点とした、いわゆる「太陽族映画」が続々と公開されるようになると、上映禁止運動が過熱。その憤りの矛先は旧映倫にまで及び、マスコミから「馴れ合い審査」などと映倫批判が高まった。こうした動きに呼応し、ついには文部省（現・文部科学省）が規制のため法的規制を辞さない強硬姿勢を見せる。国家権力による検閲制度の復活につながる危機感を感じた旧映倫は、映画界の自主審査機関という基本路線は維持しつつ、業界から独立した第三者機関「映倫管理委員会」（新映倫）として1956年12月に新たなスタートを切った。

ックであるPG12は、1998年R18という4つの区分が出来上がり、新しく設けられた区分です。

石川 1958年に、「成人向映画」が「成人映画」という名称に変わりました。その後、（ソフトポルノと称された）『エマニエル夫人』が1974年12月に公開され物議を醸し、成人映画と一般映画の間に区分を設ける必要が出てきたため、「一般映画制限付（R）」という区分が1976年に新設されました。

その後、一般、R、成人の3区分がずっと続いてきましたが、1998年5月に「PG12」が誕生し、この時にG、PG12、R15、

R18という4つの区分が出来上がり、PG12が生まれたきつかけは、何だったのでしょうか。

石川 海外でもこういった区分はたくさんあったということが1つ。そしてもう1つは、海外のホラー映画の中に、残酷な作品がたくさん出てきたのです。これを子供たちに見せていいのか？という問題なり、PG12を取り入れたと聞いています。当時は、「12歳未満は、親または保護者の同伴が望ましい」というPG12の説明でした。

尾崎 当時委員長を務められていた清水英夫さんが海外に視察に

ですから、作業量は大変でしょう。石川 二次利用も含めて、2019年は1000本ほど（長編・中編・短編・新版などを合わせて1021本）を審査しました。それを9人の審査員が担当しています。1本につき必ず2人で見るとしています。ですから、1人につき1年で250本ほど、多いときは300本近く見ていると思います。

尾崎 私は、去年はピンク映画からアニメまで、250本ほどを審査しましたね。

石川 今年は、新型コロナの影響で、洋画メジャーの外国映画の審査依頼が止まっていますが、本数そのものは戻ってきており、8月は前年比で増えました。ただ、今（11月現在）はまたちょっと減っていますね。

——映画好きの人から見れば羨ましい気もしますが、仕事で年間250本はなかなか大変ですよね。石川 確かに羨ましいと思われと思います。ただ、シナリオを読み、事前の（映像の）チェックもありますし、1日1〜2本は見

行き、（G、PG、Rの英語の）表記なども含めてリサーチされたそうです。

石川 そして、2009年に「R15+」「R18+」という名称となり、現行のレイティングシステムが施行されました。

——PG12は、残酷・暴力描写がきつかけで設けられた区分なのですね。

尾崎 80年代よりは、性愛描写が審査の焦点だったと思います。ところが、1997年に神戸で「酒鬼薙魔事件」が起き、その前には「宮崎事件」もありました。暴力が青少年に与える影響を、映倫としても考えなければいけないのではないかと。

石川 その事件があったから、と直接結びついているわけではありません。例えば、宮崎事件の場合、犯人の自宅から残酷な描写の作品のビデオが出てきたと報道されたことありますが、実際は色々なジャンルのビデオがたくさんあって、一部そういったジャンルがあったという程度だったようです。でも、マスコミはそれを結び

ているので大変です。——鑑賞中に寝ませんか？**尾崎** 不思議と寝ません。家でのんびりと見ている時は眠くなることもあります（笑）。

石川 プライベートで映画を楽しもうとする時も、つい審査してしまします。

尾崎 そうそう（笑）。

石川 他の審査員が見た作品で、PG12とかが付いていると、「ああ、ここぞとつたんだ」とか。一般のお客さんが羨ましいのです。例えば『鬼滅の刃』の最後の戦いの場面では、お客さんは涙を流していると思いますが、私たちは「これ以上は（残酷に）ならないでくれよ〜」とかいう感じで見てしまうので（苦笑）。

石川 私は以前興行の仕事をしていたので、それが終わっても、映画を数字で見るクセがなかなか抜けず、素直に楽しめるようになって数年かかりました。でも、この仕事をやるようになり、今度は審査員の目で見てしまっています（笑）。